

れきしみち

2021.9
No.122



文鎮 鶏



馬面



本多政重画像



文鎮 宝尽くし



丸に立葵紋付き基盤・基筒

表紙掲載の資料は
全て加賀本多博物館蔵

P2
特集①

特別展 加賀本多家 — その歴史と至宝 —

P4
特集②

企画展 THE 三河MANZAI

P6 松平シンポジウム報告 [3]

P8 … 安祥文化のさとまつり案内
市民ギャラリーよりお知らせ

安城市
歴史博物館

Anjo city Museum of History

れきしみち No.122 令和3年9月発行 編集・発行 安城市歴史博物館

(指定管理者：安祥文化のさと地域運営共同体)

安城市歴史博物館 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地 TEL 0566-77-6655

安祥文化の
さとまつり
第16回

戦国の秋まつり

武者行列

豪華景品が当たる
富くじ

火縄銃演武

チャンバラ合戦

歴史や芸術にふれあえる様々なイベントを開催！

令和3年 **10月9日(土)10日(日)**

時間 9:00～16:00

会場 安祥文化のさと

・歴史博物館 ・市民ギャラリー
・埋蔵文化財センター
・安祥公民館 ・安祥城址公園



【主なイベント】
9日 ・安城市の伝統芸能の実演(三河万歳・棒の手)
10日 ・和太鼓や書の実演などのステージ公演
両日 ・勾玉づくり、花押はんこづくりなどの体験コーナー
・さとマルシェ
・歴史のひろば展、発掘のあゆみ展などの
歴史関連展示

同時開催
第30回
市民陶芸
まつり
【会場】安祥公民館

10/9土
9:00～16:00

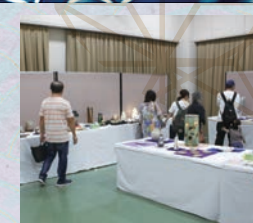
10/10日
9:00～12:00

作品展示

公民館の自主グループ等の作品を展示します。

陶芸作品チャリティーバザー

市内の陶芸グループ等にご協力いただき、
色々な陶芸作品を手ごろな価格で販売します。



安城市民ギャラリーよりお知らせ

市民ギャラリー企画展「Home～ホーム～」



所澤夫 《ベルシャ猫》



中島音次郎 《静物》

本展では「Home～ホーム～」をテーマに、市民ギャラリーのコレクションの中から選りすぐった作品と市内小中学生から寄せられた作品を併せて紹介します。

【開催期間】 令和3年10月8日(金)～10月17日(日)
【時間】 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
※最終日は9:00～16:00
【会場】 安城市民ギャラリー展示室 D・E
【観覧料】 観覧無料

安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

【全館共通事項】

住所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00～21:00
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください

安城市歴史博物館

URL / <https://ansyobunka.jp/>



特 別 展

加賀本多家

特 | 一の歴史と至宝 |

令和3年

10月2日(土)～
11月14日(日)

観覧料 500円

※中学生以下無料

これまで安城市歴史博物館では、「安城ゆかりの大名」として地元出身の大名やその一族を取り上げ、展覧会を開催してきました。今回は、石川県金沢市の加賀本多博物館のご厚意により、収蔵品を一括してお借りし、市内小川出身とされる本多正信の次男政重を始祖とする加賀本多家の品を展示します。

※掲載の資料は加賀本多博物館蔵

本多政重とは

加賀本多家は本多政重を初代とし、代々加賀藩前田家に譜代中級大名クラスの五万石で仕えた藩家老役の上位の年寄衆です。加賀藩にはこのような家は八家あり、江戸時代は「加賀八家」と称されていました。加賀本多家は其中で一番の知行を受けていました。

系図などによると初代政重は、天正八年（一五八〇）に三河で生まれたとあります。父正信は永祿七年（一五六四）の三河一向一揆終結後に三河を退出し、畿内あるいは、加賀で門徒武士として戦ったという伝説が残っています。その後長い間、三河から離れていて、その間、正信の長男正純や妻は家康家臣の大久保家に厄介になっていたと「三河物語」にあり、長らく正信は三河に戻っていません。正信が帰参した事が史料上で確認できるのは、天正壬午の乱という、天正十年の本能寺の変後に武田氏旧領を上杉・北条徳川が取り合った時期にあらわれます。すでに家康の意志を甲斐・信濃の土豪らに伝える奉者として出てくるので、信頼を得るに至ることを考慮すると、数年前には戻ってきていたのでしょう。政重はその頃に生を授かった人物なのです。

その後、倉橋長右衛門の養子となり、長五郎の名で秀忠の小姓となりましたが、いさかいがあり、慶長二年（二五九七）、一八歳で伊勢国山田（三重県伊勢市）に蟄居しました。伊勢で大谷吉隆（吉継）に召されて京都に移り、翌年豊臣五大老の一人宇喜多秀家に正木左兵衛と名を改め二万石で仕え、同五年の関ヶ原の戦いでは、西軍に属して、家康に弓を構えることになりました。

関ヶ原の戦い後、高野山に蟄居していたところ、福島正則に召されて三万石で仕えましたが、同七年に福島元を去り、ここで本多姓に戻して、加賀の前田利長に

[illegible]

本多系譜 政重項

一書入の二書
レ地、おれは、
く仲、あまに、
切年、あまに、
清路、あまに、
清路、あまに、
清路、あまに、
清路、あまに、

本多政重宛 上杉景勝書狀

加賀藩の中の本多家

仕えました。ただ、ここも長く仕えず、同九年に出羽国米沢（山形県米沢市）の上杉景勝家臣直江兼続の婿養子となり、直江勝吉に名を改めました。しかし、同十六年には、再び前田家に仕えました。

政重のような、何人もの大名に仕えることを「渡り奉公」といい、政重だけではなく、叔父にあたる正重や、滅びた大名の家臣などの多くは、自分を認めてもらえる、あるいは安定した奉公先を求めて動いていました。政重の場合、徳川家で問題を起こしたため、家康の息のかからない奉公先として、豊臣大名を仕官先としていました。これらの事に関する文書史料を本展示で数多く紹介します。

政重が加賀藩前田家に再び仕えたのは、藤堂高虎の仲介によるものですが、前田家側にも理由があったと思われまゝす。関ヶ原の戦い、そして、江戸幕府が開かれていく中で、父本多正信と兄正純は幕政を動かす重要

には市松文様を描き、その内部に宝尽くしの文様をあしらっています。金高時絵や金貝・付描などの精緻な技法が用いられたものです。

本多正信のこと

な地位に就いていて、特に外様大名政策は正信・正純が担っていました。政重の「渡り奉公」との関係は今後の研究で明らかにされるでしょう。

前田家に仕えた政重は従五位下安房守に叙任され、金沢城内外に広大な屋敷と、本多家家中の屋敷群を構えました。加賀本多家は江戸時代を通してこれらを代々継ぎました。



上屋鋪御館惣絵図

今に残る武具

加賀本多家には代々当主所用の武具が現在まで大切に保管されています。初代となる政重や父正信のものとなる武具が伝来されています。今回の展示では、政重所用の陣羽織、兜、甲冑や、特に種類の多い馬具を展示します。

「の」の字文象嵌鍔は加賀象嵌の精緻さと鉄の美しさを見ることができます。



「の」の字文象嵌鑑

藩主前田家から加賀本多家に二度姫の入嫁がありました。初めは二代政長に三代藩主利常の娘春姫が嫁ぎましたが、娘を一人生んだ後に、二〇歳で死去しています。もう一人は九代政和に二代藩主前田斉広なりがの娘寿々姫ナナナが嫁ぎました。しかし、嫁いだ翌年一七歳の若さで死去しました。両者

姫にまつわる調度品

で死去しました。両者とも次代当主をもうけることはありませんでした。

寿々姫の輿入れ品が残されていますが、姫らしい品として雛飾りの御膳一式(姫道具)、菓子を入れる七宝散らし文菓子重など、細かい細工の塗り物などがあります。前田家からの下嫁なので、剣梅鉢紋があしらわれています。

また、加賀本多家伝来のものとして、梅根笹梨子地宝尽し文蒔絵盃台があります。盃を載せる台で、見込みに花を付けた太い幹の老梅、幹の周囲に笹を配し、側面の三方



梅根笹梨子地宝尽し文蒔絵盃台



姫道具(雛御前)

収藏品の中には
 父本多正信に關す
 る資料も多く残っ
 ています。正信画
 像と碑銘拓本(石
 摺)、腹卷(甲冑)、
 そして「本佐録」な
 どです。正信碑銘
 は京都南禅寺の景
 烈祠内にあって、
 龜の背に碑が立て
 られている龜趺碑
 です。拓本作業を
 行つた時期は不明ですが、正信画像が嘉永年間の幕末
 に模写されていることから、何等かの正信に対する顕
 彰がこの時期にあり、その一環で拓本が取られたとも
 考えられます。

The image shows two octagonal items side-by-side. The one on the left is a black lacquered box (honji) with a gold-colored border and three circular medallions (mon) on its lid. The one on the right is a wooden rubbing of a stone inscription (honji), showing the texture of the stone and the characters of the inscription.

本佐録塗箱



箱塗録佐本

加賀本多家の貴重な收藏品が一堂に館外で展示されるのは初めての事です。この機会に本多正信、政重ゆかりの地、安城市歴史博物館へぜひお越しください。

企画展

THE 三河MANZAI

開催期間

令和3年

令和4年

12.4 (土) ~ 1.16 (日)

休館日／月曜日・12.28(火) ~ 1.4(火)

* 1月10日は開館

観覧無料

三河万歳は、安城の別所などに住む人々によって伝えられた新春の祝福芸です。彼ら万歳師は、江戸時代には江戸をはじめ関東一円をまわり、人気を博しました。明治時代には厳しい統制を受けることになりましたが、かたちを変えながらも今日まで守り伝えられ、平成7年(1995)には西尾・幸田とともに国の重要無形民俗文化財に指定されました。

本展では、本館がこれまで収集・保存してきた三河万歳に関わる資料をあますことなく紹介します。

第1章

THE MANZAI = 三河万歳

三河万歳は、その名のとおり三河地域の人々が演じる新春の祝福芸のことです。「三河」と「万歳」が組み合わさった表記は、「三河万歳由緒書」(資料①)に記された「三河国万歳師」にみることができま。江戸時代には、江戸をはじめ関東二帯をまわった万歳師の多くが三河の万歳師であったこともあいまって、関東で万歳といえは「三河万歳」と認識されていた時代です。

万歳は、中世、京都の千秋万歳と呼ばれるものから始まったとされます。江戸時代には三河をはじめ、全国各地に万歳師がいました。その代表的なものとして、江戸時代の風俗を記した『守貞謄稿』には、三河万歳と大和万歳を対比した記録があります。大和万歳の装束は丸に橋をあしらった文様が施されるものとされ、『万歳図掛袱紗』(資料②)の右側の扇を持つ太夫の衣装にはその橋らしき文様がみられます。

この資料には三人が描かれており、二人一組を基本とする万歳とは異なります。三人とも万歳師なのか、それとも様子の異なる左側の一人が万歳師と、一緒に舞いはじめたところなのでしょう。

第2章

さまざまな万歳

第3章

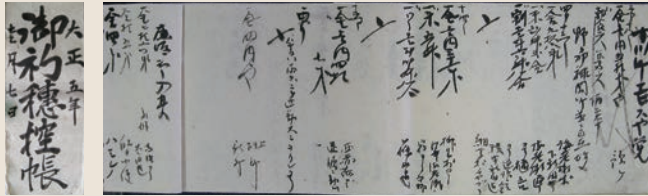
万歳の描かれるころ

『月次風俗絵巻』(資料③)には家の主人とその家族のために庭先で舞う太夫と才蔵、屋敷の入口には門に注連飾りと門松、屋敷に新年のあいさつに訪れたらしき武士、屋敷の外側には羽根つきを楽しむ子どもたちなどが描かれています。江戸時代以降には、万歳は正月の風物詩、かつ縁起物として屏風や巻物などのモチーフに選ばれました。

なお、松尾芭蕉が「山里は万歳遅し梅の花」と詠んだように、正月の風物詩である万歳も地方では少し遅れてやってきたようです。安城の別所にいた万歳師が記した記録(資料④)によれば、正月から四月十五日までお得意先(檀那場)をまわっていたことがわかります。



★資料③ 月次風俗絵巻(本館蔵)

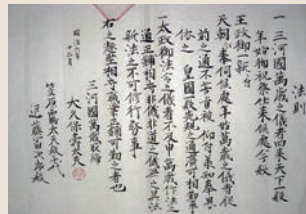


★資料④ 大正5年(1916)御初穂控帳(本館蔵)
1月の東京、前橋を皮切りとし、2月から4月にかけては下館、鹿島、藤原など関東一円を電車や船を利用してまわりました。

第5章

三河万歳の転機

貞享元年(一六八三)から、万歳師は陰陽師をたばねた土御門家に貢納料を支払うことで免許証(職札)の発行を受けて活動していました。しかし、明治三年(一八七〇)になると、陰陽師廃止の通達で明治政府から出され土御門家のお墨付きを得ることができなくなりました。同六年(一八七三)の免許証(資料⑦)は、それ以前前の職札を参考にしたつもの土



★資料⑦ 明治6年(1873)法則(西別所町内会蔵、本館寄託)

第4章

万歳尽くし

本館の収蔵資料の大部分を占めるのは、太夫と才蔵の二人が描かれた掛軸です。江戸時代から近代にかけて各家々に飾られたもので、伊藤若冲や長澤芦雪(資料⑤)ら著名な絵師も描いていました。そのほとんどは当然のことながら万歳師が舞う場面を描いたものですが、なかにはお得意先へ向かう万歳師(資料⑥)やお得意先の門をくぐる万歳師などさまざまなシーンが描かれています。



★資料⑥ 万歳図 文隆(本館蔵)

★資料⑤ 万歳図 長澤芦雪(本館蔵)

第6章

国重要無形民俗文化財の指定と現在

御門家ではなく「三河国萬歳取締」の名前で発行されています。別所や森下(西尾)の万歳師は、こうした独自の動きをみせ、神道教導職として衣装や詞を変えながら、新たな三河万歳のスタイルを創っていききました。

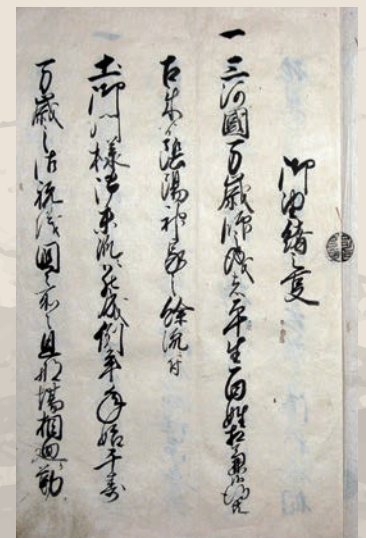
安城の三河万歳保存会は、尾張万歳系の御殿万歳(太夫と複数の才蔵が並んで演じる舞台を意識したもの)、三曲万歳(歌舞伎の名場面を題材に、鼓と三味線、胡弓の演奏を加えたもの)を伝承した、福釜町や榎前町の人々によって昭和四二年(一九六七)に結成されました。同四五年(一九七〇)には、神道三河万歳を知る茨城県に住む別所出身の若杉氏の教えを受け、名実ともに安城の三河万歳を継承する団体となりました。

平成七年(一九九五)、国重要無形民俗文化財に指定された三河万歳は、このようにかたちを変えながら繋がってきました。現在、これからの時代にも守り伝えることが課題となっています。

文責…西島庸介



★資料② 万歳袱紗(本館蔵)



★資料① 享保11年(1726)三河万歳由緒書(天保4年(1833)写し。西別所町内会蔵、本館寄託)

偕々広忠ハ良将ト感シ給フ — 広忠惣領時代の再検討 — <3>

令和三年二月十四日、安祥公民館において第10回松平シンポジウム「偕々広忠ハ良将ト感シ給フ―広忠惣領時代の再検討―」を開催しました。今回はその内容の第三弾です。

村岡氏の基調報告に引き続き、平野・大石両氏の報告と討論の一部の要旨を前回まで掲載しましたが、今回は討論に入り、①広忠発給文書の真偽について、②広忠の家督継承及び論所検地について、に引き続き、③三河における吉良家の存在価値、④天文十六年の織田信秀の岡崎急襲、⑤「駿遠軍中衆矢文写」の史料の評価の内容です。

討 論

3 三河における吉良家の存在価値

吉良は正式に守護になったことはないが、今川にとっては主家であって、三河の守護相当の家という認識があった。しかし、吉良が今川の言う事を聞かないので見切った。このような流れの中で幾つかの反乱がおこり、そうした状況を押さえていく中で、今川は三河で鍵となる安城松平家を、ちようど手頃で使い勝手も良い国衆として一本釣りて拔擢した、というのが大石氏の趣旨であった。

安城松平家は、偏諱を頂くというような形で、吉良を主家としてたのんでいたということはいえる。その他の国衆にとつての吉良というのはどんな存在だったのか、ということについて大石氏は、関連する史料が見当たらないが、「矢文写」は、今川が吉良にとつて代わる意志があったとするが、しかし、他の国衆への影響は証明することはできない、とした。

また、反今川の反乱の三河急襲が起き、弘治三年（一五五七）に手打ちの儀式が上野（豊田市）で行われた時、織田は主家として斯波義銀を立てて、今川は吉良を立てた。三河国衆がもともと吉良に対して尊敬の意識を持っていたかということは別として、むしろ今川が吉良をそういう形で



本会場の聴講風景

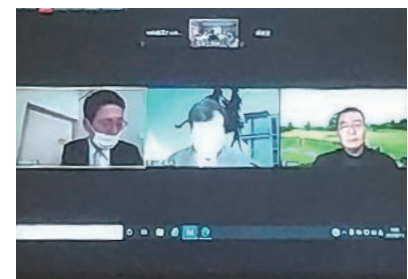
4 天文十六年の織田信秀の岡崎急襲

天文十六年（一五四七）のこの事件によって、岡崎城は織田信秀に占拠され、竹千代（家康）がその際に織田の人質となったのではないかとの説が前提としてある。この急襲について大石氏は、急襲前後の段階ですでに松平広忠は、今川からも織田からも見限られていたという状況であったとし、村岡氏は、大石氏の示した史料にある今川の了解のもとに三河分割が出来上がっていたが、境界が曖昧のため、織田信秀はこれを破談としたという経緯を評価した。

翌十七年の小豆坂の戦いが起きるが、合戦場から近い岡崎城にいる広忠の動きが全く見えなかったことに対し大石氏は、広忠にとつては織田の人質となっている竹千代がいること、今川にとつても次代の氏真を支える同世代の竹千代が必要であった。それもあるって広忠は織田方の後方から攻めるとか、敗走した織田方を襲うなどの行為に及ばなかったとした。

5 「駿遠軍中衆矢文写」の史料的评价

大石氏の基調報告で取り上げた本史料の解釈は、天文十五年に今川氏が三河に侵攻して以来、吉良様に対して軍事行動も起こさず中立をお願いしていた。それというのも義元自身が吉良の子孫であり、吉良様を大事に思つてのことであつたと。駿遠二か国を吉良家と今川が相伝してきたが、義元の以前の敵であつた斯波氏と吉良氏は縁を結び、さらに松平竹千代（家康）を助けようと出陣して、渡・筒針に出向いた際には途中まで馬を出していた。これらのことは結局のところ義元を退治しようという考えがあつたということか。この恨みは非常に深いので、他人が吉良の家督についてとやかく言うてきても文句は言えまい。とは言いがらも、今回挙兵したのは外戚である後藤平太夫の謀略である。こうなつたからには「諸老」で評議したうえで急いで後藤を殺し、「近年の非法の所行」を改めて義元が望まれるようにせよ。



リモート会議での討論(サブ会場)

竹千代の出陣を助けるために、と読むべきであり、広忠ならば納得できるがありえないこと、当時竹千代の出陣などは到底無理とし、史料自体が偽文書であるとした。大石氏は、作者が今川義元の意を介した雪斎によるもので、敬

ま と め

平野氏は広忠の時代を議論するには、清康の時代の理解から追求することが必要であるとした。

村岡氏は、当時の武家社会の認識として嫡流かという、そもその安城松平自身が親忠の代から実力で家を統治した者が嫡流だった。阿部大蔵がひたすら千松丸（広忠）に依拠せざるを得ないのは、彼としては岡崎（松平）家の維持のためには、この人にしがみつくなという事で理解できる。清康の時代を議論できる機会がほしい、とした。

大石氏は、天文十年前後の吉良を含めた三河の情勢を研究していきたいとし、討論を終了した。

今回のシンポジウムの主人公である家康の父松平広忠期は、関連史料に乏しいため、周辺の動向から間接的に見るしかできないのが現状です。松平氏に関連する史料だけではなく、三河全体の動向や他の国衆、吉良、そして今川などを含めた研究の進展に期待します。

そして、村岡・平野・大石三氏のまとめのコメントを受けて、今年の第一回の松平シンポジウムは、松平広忠の父である清康の時期を対象とすることになりました。シンポジウムのタイトルは「安城×代岡崎殿 ― 異端児清康 ―」です。ご期待ください。

文責：三島 一信

歴史博物館連続講座のお知らせ

(全4回)

「安城松平家 ―家康以前の道筋―」

■講師／村岡幹生氏（中京大学名誉教授）

- 場所／講座室
- 時間／各回14:00～
- 費用／1,000円(全4回分、資料代)
- 定員／30名
- 申込／11月6日(土)9:00～ 電話にて受付

①11月20日± 「松平氏発祥をめぐる伝承世界」

②12月18日± 「松平一族の展開と安城家」

③1月15日± 「安城家四代をめぐる葛藤」

④2月19日± 「今川氏国衆広忠と織田氏の進攻」

第11回 松平シンポジウム

「安城×代岡崎殿 安城松平家の異端児 清康」

- 日時／令和3年10月31日(日)13:00～17:00
- 出演／コーディネーター 村岡幹生氏（中京大学名誉教授）
谷口央氏（東京都立大学教授）
パネリスト 柳沢昌紀氏（中京大学教授）
平野明夫氏（國學院大学講師）
山田邦明氏（愛知大学教授）

- 場所／アンフォーレ ホール
- ※聴講は事前申込みにてお問い合わせください。
安城市歴史博物館 TEL:0566-77-6655